も、内心は泣いての離別風景だったことを覚えている。

那覇を出発した湖南丸は、敵潜水艦に追われどおしの航海であったとのことだ。島影づたいに逃げかくれしながら、辛うじて目的地の兵庫の港に辿り着いたとのことである。かかる情勢にも拘らず、日本の勝利を信じ、ひたすら飛行機づくりに精を出したのである。勤務状態が良好ということで、飛行艇の図柄をあしらった朱塗りの木盃が、両親のもとへ送られてきた。

ところが、昭和十八年四月、父親の突然の死で、兄は一時帰郷し、喪に服していた。その間幾度となく、警官や憲兵が訪れ、早く川西へ戻るようにと催促するようになった。本人としては、居残って父亡きあとの家の面倒をみながら、現地入隊をし、国に奉仕したい気持ちであったようだ。しかし、国は、期限までに戻らねば容赦なく逮捕するとのことであった。

いよいよ昭和十八年十二月、運命の日がやってきた。隠密のうちに、再び湖南丸に乗り込み、あのような惨事にあってしまった。

兄は、家を発つ時、ザルの中のさつま芋を手にし、「最後の芋を食べて行こう。」と言うなり、「どうして、出発する際にわざわざ「最後の芋」なんて言うのか、縁起でもない。と母にたしなめられた。虫の知らせだったのか、家を発つ時の落ち着きのない態度と、静かに淋しそうに出て行った兄の後ろ姿は、心なしかこの世の人ではないような気さえした。まさにその別れを最後に、二度と会えぬ人になり、海底深くに永い眠りについてしまったのである。

直ぐ上の兄ということで、幼い時から、いつでも行動を共にした仲であった。思い出は山程あり、思い出す度に、昨日今日のように思えてならない。たとえ戦争とはいえ、人生僅か十四年で終えた事は、あまりにもはかなく、かわいそうで、残念でならない。

わたしたちは、戦争を憎み、再びこの地球上で戦争を起してはいけないことと、世界の恒久平和を願うのみである。平和が永遠に続いてこそ、戦争で犠牲になられた方々のみ霊も安らぎ、そして、うかばれることと思うのである。

海底深くに四十年余りも眠り来し兄たちのみ霊が、今回の海上慰霊祭を最後に、今後は旭が丘公薗の「海なりの像」で鎮魂くださらんことを祈願するのである。

（湖南丸遺族）

【『海鳴りの底から』（戦時遭難船舶遺族会）所収】

「糸数壕」の平和学習

具志川小学校　六年　前　堂　美　幸

朝起きたら、すぐに空を見ました。

「わあ！、お母さん、青空のいい天気だ。遠足に行けるね。お弁当作ってくれた。」

今日は待ちに待った春の遠足。六年生はバスに乗って、平和祈念公園に行くのです。うれしくて、ウキウキと学校へ出かけました。

教室の中では、みんな「ワイワイ、ガヤガヤ」とおしゃべりをしていました。

いよいよ、バスに乗って出発しました。その時、私達は五十年前の戦争のことなど、そんなに考えていませんでした。先生が資料を配って説明してくださいましたが、

「何んで戦争なんかしたんだろう、やらなければよかったのに。」
と、他人ごとのように考えていました。
目的地の糸満に着きました。バスを降りて最初の糸数壕へ入ることになりました。畑の中を歩いて行きました。
「キャー、暗くてよく見えない。地面がぬれていて、すべりそうよ。」
と、みんなは一列になって、こわごわ進みました。壕は土地の下の方に穴みたいになっています。ぜんぜん外から明かりが入ってきません。懐中電灯をつけないとどの道を行くのかわかりません。電灯を消してみると、目を開けているのに、顔のすぐ前で手を振ってもぜんぜん見えません。
「こんな所にほんとに住むことができたのかな。食事や寝る時はどうしたのだろう。」
しばらくすると、広場に出ました。そこで、私たちは「平和集会」をおこないました。
二度と戦争はしない。もう二度と殺し合わない。平和を願う努力をします。」
と、平和の誓いと黙とうをしました。壕の中で死んで行った人たちの「悲しい声」が聞こえてくるようでした。五十年の戦争の様子が私の胸の中にどんどん伝わって来ました。
次に平和祈念資料館に行きました。資料館には、戦場を逃げまどっているうちに、芭蕉布の着物がボロボロに破れてしまったのが展示されていました。そして、下半身に銃弾を受けた四才の男の子が、母親に抱かれながらこと切れたという写真と説明がありました。
「男の子はドロや血がついていて、とても痛そうだね。お母さんはとても苦しそうな顔をしている。ほんとにかわいそう。」
展示室を進みながら、私達は言葉も出なくなっていました。こんなに小さな子も戦争で命を失って行くなんて考えられない。戦争は普通の人達もまきぞいにされてしまうのだということがわかりました。

【『沖縄平和祭 '９５』（沖縄県総務部）所収】

戦争五十年を考える

川平中学校三年　　崎　山　用史郎

「梅雨の雨　戦死した人の涙かな」
この俳句は、僕が一年生の時、校内で行われた慰霊の日俳句会で作った句です。
毎年、慰霊の日の前後は、長い梅雨の時期です。僕には、このいつまでも続きそうな梅雨が、戦争で亡くなった方々の大粒の涙のようにも見えました。また、二度とあのような恐ろしい事が起きないように訴えているようにも思えたのです。
この俳句は、校内でもみんなから良い句だと選ばれ、表彰を受けました。僕は信じられないと同時に、戦争への関心を強く持つようになりました。
それ以後、戦争の本当の恐ろしさを知らない僕は、写真展や地域の戦争体験者の講演、一フィートフィルムのビデオ等を、真剣に見たり聞いたりすることで、戦争というものを知る努力をしてきました。
戦争を写した写真やビデオは、どれも残酷でひどいものです。僕はそれを、「きついなぁ」と思いながらも目をそらさずに見るようにしました。
僕が、そこで見たものは、バラバラになった死体、子どもなのに笑顔の一つも見えない

おびえた顔などです。僕はその真っ黒によごれた悲しい顔を見て、胸が痛みました。そして、何よりも多くの人々を、地獄の苦しみに追いやったことが許せないと思いました。

日本軍は、百％勝ち目がないのに、最後まで抵抗し続けて結局は負けてしまいました。それに、戦争は、始めから無意味で、人の命や財産を失っただけなのです。そのことに早く気づき、途中でもいいから、戦争を終わらせることができなかったのか、僕には不思議でなりません。

今年は、あの恐ろしい戦争が終わって、五十年目になるそうです。これまでよりも、多くの行事が、国や県で行われています。「ひめゆりの塔」という映画もおそらく、そのために作られたのではないでしょうか。

僕たちの学校では、映画封切りと同時に、その映画を団体見学しました。先生方の話によると、今度のものを含めると戦後三回も作られた映画なのだそうです。

僕は、見る前までは、あまり乗り気ではありませんでした。なぜなら、「いくら事実を描いた映画でも、本当の戦争の姿を写した写真やビデオの方が、もっとよく戦争を知ることができる」と思っていたからです。だから始めは、ただぼんやりと見ていました。

しかし、僕は、だんだん画面にひきつけられ、途中から涙さえ出てきました。

僕たちと幾つも年の違わない女子学生たちが、爆撃の激しい中で食事を炊いたり、傷ついた兵士たちの看病をしている姿は、とても本当とは思えない程でした。しかし、これは事実だったのです。五十年前の沖縄で確かにあった事なのです。

僕は、この映画を見て、あらためてひめゆり部隊の方々の姿に心を打たれるとともに戦争の悲惨さ、残酷さが身にしみて分かりました。

彼女たちは、まだ子どもと言っても良い年令なのに、大人の看護婦たちにも負けずに、昼も夜も休むことなくひたむきに働いていました。だから医者も大助かりで、苦しんでいる人の痛みを和らげたり、けがを直してやることができたのです。もし、彼女たちがいなかったら、犠牲者はもっと増えていたかもしれません。

僕が、何よりも許せないと思ったのは日本軍のやり方です。逃げ場がなくなった住民を牛馬みたいに扱って壕に入れなかったり、方言を使うとスパイだと決めつけて、切りつけたりしている場面では、心の底から怒りを感じました。

このような日本軍の横暴なふるまいは、僕が住んでいる八重山でも起こりました。マラリア有病地に、住民を強制疎開させ、多くの方々が亡くなってしまったのです。この場面は僕にそのことを思い出させたのでした。

さらにひどいことには、逃げる時、歩けなくなった兵士たちに毒入りのミルクを飲ましたり、行き場のない女子学生たちに解散命令を出したりしたのです。僕はもうむちゃくちゃだと思いました。兵士でさえも大変なのに別々に行動せよと言われても、彼女たちにいったい何ができたでしょう。生徒たちがたどる道は、小グループでの集団自決だったのです。僕は彼女たちの身体がバラバラにとび散っていく場面を残酷で見ておれませんでした。

戦後五十年をむかえる今、あのひめゆりの生徒たちは、安らかに眠ることができているでしょうか。

戦争はどんな戦争も意味がなく、残酷なもの。僕は、そのことをはっきり確信し、戦争のない世界を願いたいと思います。

【『沖縄平和祭 '９５』（沖縄県総務部）所収】

人間の絆

首里高等学校　三年　渡嘉敷　益　子

「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」を読んで、私が最も心を打たれたのは、人と人との絆である。師を信じて、その言葉を守り尽くそうと死んでいった乙女達。そして死んでしまった我が子を、もしかしたらと一るの希望も捨て切れずに探し回る親達。その驚くまでの絆の深さに、私は感動を覚えた。

人々は戦争という異常事態の中で、子への親の愛情を確認している。しかし肉親の愛情特に親から子へのそれは古代から人間が本能的に持っていたものだと思う。戦争があったから愛情が深まったのではないのだ。家庭の崩壊が叫ばれている現代でも、肉親の愛情は今も変わらずに私達の体に受け継がれている。

戦前の教育は、天皇のために死ぬのは名誉なことだと教えていた。しかし、敵に突撃していく兵士や少女達が最後の最後に想ったのは、親に一目でもいいから会いたいということではなかったろうか。また親も非国民扱いされるから口には出せなかったが、出征する子供に、ただ生きて帰ってこいという一言が言いたかったのではないか。ここに私達はどんな教育や思想もはね返す、親子の愛情を見ることができる。人は身近な人間一人一人と様々な関係を結んでいる。まったく知らない人とどこかでつながっているかもしれないが、関わりあって笑い、涙するのは自分が直接知っている人との間だけである。だからどんなに力のある権力者がいたって、遠い存在であればその人のためになんて死ねない。忠誠心なんて持てない。国のために死んだからって、誰も納得しないだろう。周囲の人々はただ生きて帰って欲しかっただけなのだ。断たれてしまった絆の処理に、つながっていた人々は困惑しただろう。世の中にはこんなに大勢の人間がいるけれども、誰も死んでしまった者の代わりにはなれないのだ。

私達沖縄県民は、戦争の恐しさを骨身にしみて感じている。戦争は人と人との絆を断ち切り、残った者に深い傷を残す。戦争の話をする祖母達の目に浮かぶのは、私達に傷はまだいやされていない事を伝えている。戦後五十年を経た今も。

戦後五十年、これを節目にして私達が直視しないといけない事実がある。それは、我々日本人が加害者でもあったということだ。中国での大虐殺を始め、大東亜共和国の名の下に繰り返し行われた侵略、植民地化。さらに、慰安婦としてまだ幼い少女を連れ出し辱めた。だんだん明らかになってくる日本軍のアジアにおける蛮行は、これが人間のなせる業かと思うような、つい耳を塞ぎたくなることばかりである。さらに悪いことに、日本の政治家は、日本軍の犯した罪の数々を認めたがらず、失言を繰り返し、アジア各国に不信感を植え付けている。日本と同じ敗戦国のドイツは、戦後すぐにユダヤ人虐殺の謝罪をし、生活保障もしている。これがなぜ日本にはできないのだろうか。私達は戦争の残した痛みを知り尽くしている。だがなぜアジアの人々が我々と同じように傷ついていることに気付けないのだろう。日本軍のせいで断たれてしまった絆は決して少なくない。また、狂わせてしまった個人の一生はもう取り返せないのだ。私達ができることは、心からの謝罪とともに、被害者達への物質的、金銭的援助ではないだろうか。経済大国の日本にとって、元従軍慰安婦達の求める生活保障に応えるのは、難しくないことである。また、被爆国とし

て平和をアピールする心が本物であれば、アジア諸国に対する謝罪も苦ではないはずだ。人に自分の過ちを指摘されるのは、おもしろくないことだ。しかし、己れの誤りを認め反省しなければ人間としての成長はない。これと同じく、日本も今自分の過ちを認めなければ、アジアの中の日本としてこれから成長することはできないのである。

私達は今、加害者でもあり被害者でもあったという事実を冷静に認識し、その上で戦争の恐ろしさを声を大にして叫びたい。戦争の前では勝者も敗者もなく、ただ悲しみが残るだけである。

私に近しい人々が死ぬ事は、私には耐えられない。また、苦しみを他人が負うのも見たくない。だから私は平和を望む。単純ではあるが、このような思いから戦争反対は始まると思う。ここ沖縄に、またその他全ての場所に、二度と苦しみや悲しみが残ることのないように、私の子や孫も過去を忘れることなく平和に暮らせることを祈っている。

【『沖縄県平和祭 '９５』（沖縄県総務部）所収】

命どぅ宝

狩俣小学校　五年　　上里　洋志

この広い緑の大地が
青くすみきった大空が
コバルトブルーにかがやく広い海が
そしてたくさんのとうとい命が、
戦争というみにくい戦いで
うばわれてしまった。
戦争は、火の雨
ゆめも　希望も　そして
大切な宝も
まっ赤な雨は、流してしまう。
戦争は、火の色
町も、人も、そして
楽しいお祭りも
まっ赤な炎で
燃やしてしまう。
戦火と命の限り戦った人々の
命ももうもどらない。
あれから五十年。
あれ果てたこの地が
五十年のさい月をへて
大地も　空も　海も
昔の美しい姿をとりもどした。
そして、

戦いの中で助けを求めながら、
死んでいった人々のさけび声は、
今も、
遠くから聞こえてくる。
「もう戦争はよそう。そんな国は作らないようにしよう。
　そして、二度と同じあやまちをくりかえすな」と。
太陽がギラギラとてりつける
まぶしい日ざしの中で
ぼくは生きている喜びを
かみしめている。
だから今、
平和な時代に生きているぼく達は、
これからもずっと
平和を守るための努力と
そのための小さな勇気を
わすれてはいけない。
世界中の人間はみんな
たったひとつの地球の中で
生きているのだから。

【『沖縄平和祭　'９５』（沖縄県総務部）所収】

「戦後五十年」過去から学ぶ

西表中学校　二年　　星　光

今から五十年前
戦場へ行くことが正義だったあの頃

家を焼き　人を殺し
緑の山を焼け野原にし
青い海も血の色に変えてしまつた戦争
我子を戦地へ送り出し
うつろな目をして焼け野原を歩く母親
生と死を見つめ
寒い思いをして洞窟でふるえおののく老人
親を亡くし
うらむことすらわからない子供たち

ある者は砲弾でふきとばされ
ある者は追いつめられて
集団となって自らの命を断った

あの悲惨な体験は
戦争の歯どめになる
平和をつくりだす力になる
過去の戦争が残したものは大きく
残された人たちの悲しみは大きい
あたりまえの生活を奪い
幸せまで奪ってしまった沖縄戦
そのことを永遠に忘れてはならない
二十万人の尊い命を無駄にしないように
二度と戦争を起こしてはいけない

僕はふりそそぐ太陽が好きだ
僕は明るく陽気な沖縄の人が好きだ
あたりまえの生活が
この地球に住む人々に
平等に与えられるように
平和の尊さを語り伝えよう

【『沖縄平和祭 '９５』（沖縄県総務部）所収】

六月の風の中で

翔南高等学校　三年　　川田　友美

忘れないで
私達が生きていた事を
忘れないで

青い珊瑚の島で
赤い花と三味線を愛し
武器を持たない歴史を
脈々と受け継いできた人々が
ある日
海の向こうからやって来た
砲煙弾雨に襲われた
理由も分からないまま逃げまどい
得体の知れない不条理さに怯え
無念の短い声を残して生涯を閉じた

今日
雨上がりの六月の風の中に
私は彼らの声を聞いた

忘れないで
私達が生きていた事を
忘れないで

吐息と共に吐かれ続けた彼らの声は
五十年たった今
「平和の礎」に刻まれた
浮き彫りにされた彼らの魂、痛み
そしてせつない願い

この礎に
会う事の叶わなかった私の祖父の名がある
やっと見つけた息子の名を
しわだらけの指で
いとおしみ、なぞり続ける年老いた母の姿も
見えてくる
彼らが望んだ人間として生きてきた証は
黒く光を放つ石に留められた

忘れないで
私達が生きていた事を
忘れないで

忘れない
私達は忘れない
彼らの祈りは
雨上がりの六月の風をはらみ
今、「平和の礎」を吹き抜けて
人々の心の奥深く吹きこんでゆく

【『沖縄平和祭 '９５』（沖縄県総務部）所収】

第４章　回顧談（録）

回　顧　談

南洋群島帰還者会
会長　宜野座　朝憲

◇　日本の委任統治領時代に旧南洋群島には多くの県人が生活しておりましたが、戦前の生活状況や戦時中の御労苦についてお聞かせ下さい。

旧南洋群島は１９１９年、第一次大戦後のベルサイユ条約により、日本の委任統治が認められ、マリアナ群島、カロリン群島、マーシャル群島からなるミクロネシア全域を植民地として発足し、各島に開拓移民を送りこんだ。

沖縄からは大正７年頃初期移民が渡島、その後続々と農、漁業移民がサイパン、テニアン、ロタ、ヤップ、パラオ、ポナペ、トラックの各島々へ渡り、その数６万人と言われた。

勤勉な県人は各島において、農業、漁業、商業、その他各分野に活躍、生活も安定し、特にサトウキビ農業は経験豊富な沖縄の人々に適しており、サイパン、テニアンにおける南洋興発株式会社による糖業はすばらしい発展を遂げ、１２５万ピクル（１ピクルは約６０キロ）の生産高を上げていました。そのような中で、年間２百万円の送金が南洋群島移民者の中から行われ、戦前の沖縄県財政に貢献したのであります。

また、南洋群島における漁業は沖縄県人の独壇場であり、糸満、港川、奥武、本部、伊是名、津堅等の漁師が各島で活躍、特に鰹節の生産高は全国の生産高の数倍に当たり、実に驚くべき業績を上げておりました。

このようにあらゆる苦難と障害を乗り越え、血と汗のにじむ努力を重ね、永年に亘って築き上げた基盤、財産、家庭も突如として勃発した太平洋戦争によって、幾多の尊い生命と共に失ってしまいました。

サイパン、テニアンは昭和１９年７月と８月に在留邦人、現地人を巻き込み地上戦が行われ玉砕、ペリリユー、アンガウルも９月に米軍が上陸し共に激しい戦闘の末玉砕された。

地上戦が行われなかった島々でも連日の空爆や艦砲射撃に襲われたのであります。

営々と築き上げた財産、家庭、友情が一瞬にして崩れさり、県人同胞、肉親の尊い生命が奪われました。

旧南洋群島における県人戦没者の数は実に１万３千名におよんだ。

◇　宜野座会長は戦禍をどのように生き抜いてきましたか。

私は昭和５年９月にマリアナ群島テニアン島で生まれました。戦雲急なる昭和１８年テニアン国民学校を終了と同時に南洋庁パラオ中学校へ入学、制海空権共に米軍の手中にある中、パラオの渡航で「別れたらこれが最後になるから行かないで」と泣いて止める母親を振りきって入学。パラオ島コロールへ渡った。結局これが両親弟妹との最後の別れとなった。

１３歳にして初めて親元を離れ入寮、団体生活に入る。その後、勉学、教練、奉仕作業に励み、パラオ本島アイライ飛行場建設の奉仕作業中、昭和１９年３月３０日、３１日にパラオ初空襲に会い級友２人を失う、同年７月サイパン玉砕の報により級友数名と共に予科練幼年学校へ志願し、巡洋艦名取に乗りミンダナオ、セブレイテを経てマニラに到着、次便船待ちの間に、在マニラ日本大使館より要請があり、現地で就職し庶務課勤務となる。

米軍のレイテ上陸により大使館は閉鎖され、私はバギオ領事館へ転勤を命ぜられ、昭和１９年１２月３０日バギオへ赴任、連日のＢ２４の空襲により防空壕暮らしとなり、昭和２０年３月より、ルソン島北部山岳地帯へ在留邦人婦女子を引率逃避行に入る。昭和２０年３月より９月下旬迄の６カ月間連日の空襲、砲撃で住むに家なく食うに食なく毎日１０キロの道を逃げまどう。飢えをしのぐため、パパイヤの根、バナナの芯、桑の葉、ネズミ、ヘビ、タニシ、雑草とあらゆる物を食べて生き抜いてきた。

婦女子は食を求める術がなく、餓死していった。

また、ルソン島北部の山中には、何十万という山下兵団の兵士等が集中していた結果、原住民に対する食糧等の略奪が横行し軍規は乱れ、病死や餓死、被弾死した死体や白骨化したのが山野に累累としており正に地獄の様であった。

昭和２０年９月末、山中より米軍に投降、ルソン島南部コロンバン収容所に入る。

１１月３日マニラ港より駆逐艦にて出港し鹿児島県加治木町に上陸した。

◇　終戦を迎え在留者の心境はどのような状況でしたか。

サイパンやテニアンの収容所内における在留邦人は、太平洋戦争の勝組、負組に分かれて争いがあり、サイパン収容所においては勝組が負組を殺す殺人事件も起こった。

しかし昭和１９年７、８月頃より２１年の最後の引き揚げまでお互いに助け合って暮らしてきた。なお、米軍は作業等の使役に対しドルで日当も支払われた。

当然その間収容所内においては、流言飛語も広がった。日本軍が逆上陸して来るとか、連合艦隊が救援に来るとか色々あって、誰も日本が負けるとは思っていなかった。

小学校も開校、テニアン収容所では米軍将校の計らいで中学校も出来て児童達への教

育も再開された。このサイパン、テニアンの在留邦人収容所の管理については、米軍も次の作戦である沖縄本島上陸に際し多大なる参考になったようである。

◇　郷里への引き揚げ状況をお聞かせ下さい。

終戦により南洋群島から郷里沖縄への引き揚げについては、各島の事情により異なったが大体昭和２０年１０月頃から始まり、サイパン、テニアン、ロタ、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ等から昭和２１年５月頃迄に約３万３千名の沖縄県人が引き揚げて来た。

各収容所では、日本人、朝鮮人、台湾人に区分されおり、沖縄県人は各島より直接沖縄へ送還された。引き揚げ船は米軍のＬＳＴで３隻ないし４隻で船団を組み各島から直接５日から１週間かかって中城湾へ入港し、久場崎に上陸、ＤＤＴの洗礼を受けインヌミヤードィの一時収容所に入りここから各市町村へと送還された。

◇　戦禍で親兄弟や財産を失い着の身着のままの引き揚げで生活は大変だったと思いますが、その当時の状況はどうでしたか。

南洋群島から引き揚げて来た当時の沖縄は、サイパンやテニアン同様、鉄の暴風を受けた後であり、山野は未だ戦渦の跡が生々しく残っており引き揚げてきても自分の出身地に帰れない人々も居た。いたる所に米軍キャンプがあり、戦闘部隊が駐留し世情は未だ混沌としていた。

生活状況は一般住民も同様であったと思うが、ただ引揚者においては、南洋群島の収容所時代に習得した自動車や重機類の運転技術、看護婦、語学等により米軍への就職は比較的に有利であったと思う。

全ての人々が終戦により無一物で引き揚げて来たが、進取の気性に富んでいた南洋群島引揚者は、個々の分野において沖縄県の復興のために活躍した。

◇　南洋帰還者会の結成とこれまでの活動状況について。

昭和２１年の末迄に南洋群島より引き揚げが完了し、各市町村に落ち着いた引揚者も郷里へ還ってきたものの、殆どの人々がさしたる財産も無く先行き不安もあったではなかろうか。

昭和２３年２月に、当初の石川市宮森小学校校庭において、南洋群島における戦没者１２，８００余名の慰霊祭を兼ねて生存引揚者の集会が開催され、その場で南洋群島帰還者会が結成された。同会の主たる目的は、南洋群島への再渡航であった。

同会としてマッカーサー司令部宛に南洋群島への移住許可要請を行ったが、実現しなかった。

昭和３８年に那覇市識名霊園の一角を那覇市より永代借地権を取得し、南洋群島における太平洋戦争による戦没者及び開拓の途次物故したみ霊を祀る、南洋群島沖縄県人戦没者及び開拓殉難者慰霊碑を建立し、爾来毎年沖縄県慰霊の日に当たる６月２３日に慰霊祭を行っている。

生存引揚者の殆どが遺族であり、肉親の眠る地を訪問し供養したいとの念が強く昭和４８年６月、当時の琉球政府から補助金１万５千ドルを得てサイパン島に慰霊碑建立と墓参を実現した。これが戦後初のサイパン、テニアンへの墓参となり、激戦地サイパン島に慰霊碑「おきなわの塔」が建立され爾来毎年、沖縄県、沖縄県遺族連合会、南洋群島帰還者会の三者の共催による現地慰霊祭が行われている。

その後南洋群島帰還者会により、昭和５２年と昭和５３年にパラオとテニアンに戦没者慰霊碑「沖縄の塔」を建立し毎年現地において慰霊の法要を行っている。

同会としては、毎年６月２３日に総会と懇親会を行い会員相互の親睦を深めている。また、この日に合わせサイパン、テニアン、ロタ、パラオの高校生と教師を沖縄に招き、沖縄の高校生との交流、各施設を見学し沖縄を理解してもらい、今後との親善交流に役だってもらう所存であり、本年で８回を迎える。

併せて、現地慰霊墓参訪問時に各小学校へ学用品、スポーツ用具等を寄贈し児童達から喜ばれている。

毎月２１日は理事役員会を開催し、年間行事の実行関係団体との連絡事項等の討議を行っている。

関係団体としては、サイパン会、テニアン会、ロタ会、パラオ会、ポナペ会があり相互の友情と連携を密にして親睦を深めている。

会の会計は全て寄付で賄われており、各員一同ボランティア精神で地域社会や役員に対する奉仕の心をモットーにしており、これからも戦没者の慰霊を行いさらに旧南洋群島との親善友好を図って行くつもりです。